

テモテ第二2章14-26節 「良き働き人」

1A 真理の言葉の説き明かし 14-19

1B ことばの論争 14-18

2B 神の不動の礎 19

2A 不義を避けた生活 20-26

1B 尊い器 20-21

2B 情欲 22

3B 無知な思弁 23-26

本文

テモテへの手紙第二2章 14 節から、読んでいきます。テモテへの第二の手紙のテーマは、「ゆだねられたものを守る」ということです。第一の手紙も基本的にそうでしたが、第二の手紙はパウロが皇帝によって死刑判決を受ける直前に書かれたもので、彼がいなくなった後でも、主イエス・キリストの福音がきちんと伝わっていくように教えています。さらに、パウロが牢獄にいるということで、多くの働き手でさえが彼から離れたという事実がありました。主にある苦しみを共にしていくということにも、勇気の要ることでした。そこで私たちは前回、神の恵みによって強められることを教わりました。「2:1 そこで、わが子よ。キリスト・イエスにある恵みによって強くなりなさい。」そして、主の働き人がどのような存在であるかを、その性質を三つの喩えで教えました。キリスト・イエスの兵士であること。これは、主の命令に服するということですね。そして、競技者でありました。これは、目標に向かっているので、規定があり、鍛錬するということでした。そして農夫です。そこには忍耐と労苦があります。

それから、その働き人の思っているべき事は 8 節に書いてあります。「ダビデの子孫として生まれ、死者の中からよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい。」死者の中から甦らえられたイエス・キリストをいつも思っていない、ということです。この中にはほとんどが、映画「復活」をご覧になったと思いますが、甦らされたイエスを目の当たりにして、生き生きとした希望と信仰を抱いて喜んでいる弟子たちの姿がありました。主が今、生きておられるという信仰によって私たちは生きています。

それから、主に再びお会いするまで、この地上における行程があることを教えています。11-13 節です、「もし私たちが、彼とともに死んだのなら、彼とともに生きるようになる。もし耐え忍んでいるなら、彼とともに治めるようになる。もし彼を否んだなら、彼もまた私たちを否まれる。私たちは真実でなくても、彼は常に真実である。彼にはご自身を否むことができないからである。」主にあって死ぬことによって、生きることができます。そして、主を否んだら、主に否まれるけれども、主が私たちに真実であられる、ということです。主と共に忍耐する道を教えています。

1A 真理の言葉の説き明かし 14-19

そして 14 節から、パウロはテモテに、第一の手紙でも教えていたことを教えています。それは、テモテが指導しているエペソにおいて、違った教えを教え、無益な議論に走っている者たちがいるけれども、そのようなことをしないように強く戒めるように教えています。

1B ことばの論争 14-18

14 これらのことを人々に思い出させなさい。そして何の益にもならず、聞いている人々を滅ぼすことになるような、ことばについての論争などしないように、神の御前できびしく命じなさい。

私たち教会に集っている者たちにとって、一つの戦い、あるいは葛藤がありますが、それは、「一つのことを思っている」という戦いです。ダビデの子孫として生まれ、死者の中から甦られたイエス・キリストをいつも思うこと、この方と共に生き、忍耐し、この方の真実の中で生かされていくということを、いつも思い出している営みが私たちにあります。それが、「これらのことを人々に思い出させなさい。」という命令です。教会に集うにあたって、人々が他のものを期待してきており、その期待に逸れていってしまう誘惑があります。自分を楽しませてくれる何かを求めています。人々を助けるボランティア活動のような期待もあるでしょう。あたかも互いに表彰状を渡すような、それぞれのしていることが褒められるような雰囲気づくりを作りたいと願っている場合もあるでしょう。そこで私たちは、いつも主役が、死者の中から甦られたイエス・キリストがおられ、この方と共に歩むことを思い出すことが必要なのです。

そしてパウロは、「神の御前できびしく命じなさい」とテモテに命じていることがあります。それは何かというと、「何の益にもならず、聞いている人々を滅ぼすことになるような、ことばについての論争」であります。ここで大事なものは、「ことばについての論争」あるいは「争い」であります。内容について議論するのではなく、言葉使いについての議論であります。内容や事実が語られている訳ではないので、際限のない、無益な議論になっています。その過程で、人々の霊性をだめにしてしまうような結果をもたらします。

いろいろな形で出てきます。何気ない一言について、「誰があのようなことを言った、言わなかった」ということがありますね。このことについては、疑いが出てくれば祈って、その人に話して、そして謝るべきことがあれば謝り、愛し合っていけばよいのです。互いに愛し合っているという、現実のもの、具体的なものがあるのですから、過ぎ去らせることができます。しかし、言葉尻によって言い争うことは、自分の心にある高ぶりや疑い、怒りや苦みが反映しています。

このことは、信仰の幼い人、信じて間もない人が行なうとは限りません。むしろ、教会に長年来ている人が、御霊ではなく肉によって何かをしたいと願っている時に、信仰のこと、教会のこと、聖書のことを使って、無益な議論をしていきます。中身のある議論であれば、するべきです。私たちは祈り、キリストの体が建て上げられていくには必要な過程でしょう。しかし、何らかの大義を掲げ

て議論しているようで、実は中身のない議論を延々とするように仕向ける場合があります。こうしたものは、神の前で避けたいといけません。これは、牧師であるとか、神学者の間でさえ起こります。つい最近も、ある信者の方が何で、ある神学についてこんなにも対立が激しくなっているのか分からないという感想を読みました。そうなのです、相手の議論をよく調べもせず、感情的に、表面的に批判するので、単なる言葉の応酬になっていることがあります。

このようなものを避けなければいけません。そして、本当に教会を分裂させる、人々の信仰をだめにするような教えがあります。テモテが取り組んでいるものですが、福音の中に巧妙に混ぜ物をしていることがあります。ガラテヤ書に書かれてあるようなものも、そうした教えです。こうしたことは、主に、牧者が取り組む務めがあります。悪い教えが入って来ないように注意しなければいけません、入れようとするのがないように、ここに書いてあるように、厳しく対処する必要があります。あるいは、牧者自身がそうした悪い教えを入れる場合があります。そうならないように、祈っていく必要がありますし、またそうなった場合には同じ群れの教会の指導者に相談することも必要です。

15 あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい。

これが、教会において牧者や教師、また聖徒たちが取り組むべき主なことです。初めに、「熟練した者」とあります。これは、「適格者」とも訳すことのできる言葉です。仕事をしっかりとこなせる適格者だということであり、認定された人ということでもあります。

真理の御言葉について、アマチュアであってはいけない、熟練した者でなければいけないということです。そして、「真理のみことば」とありますが、これは偽りもたくさんはびこっていることを前提として話しています。今、私たちは日曜礼拝でエレミヤ書を学んでいますが、そこには偽預言者が数多くでできます。彼らは、自分の心に思ったことをただそのまま語っている、感情や表面的なことを語る、また自分の思ったことを主の御名によって宣言するなどの問題がありました(23章)。そして、「まっすぐに説き明かす」と言っています。これは「真っ直ぐに切っていく」という意味がありますが、陰しい、歪んだようにしていく状態を、真っ直ぐにしていくという意味合いがあります。神の真理がはっきりと、まっすぐに見えるように、しっかりと正確に説き明かします。

そして、「恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう」と言っていますが、人々に対して恥じることのないように、ということよりも、神に対して恥じることのないように、ということです。神に適任者として認められるように、神に自分を捧げなさいという勧めです。もちろん、人々に対してきちんと御言葉が説き明かされているのか、伝わっているのかを確かめることは必要でしょう。けれども一義的には、神の御言葉ですから神に対して責任があります。終わりの日に主が評価されます(1コリント 4:5)。そして、「努め励みなさい」とあります。これは、そのままの意味です。真理の御言葉を説き明かすのに、胆力が必要です。時間が必要ですし、頭をフル回転させて、祈りなが

ら用意しなければいけません。

16 俗悪なむだ話を避けなさい。人々はそれによってますます不敬虔に深入りし、17 彼らの話は癌のように広がるのです。ヒメナオとピレトはその仲間です。18 彼らは真理からはずれてしまい、復活がすでに起こったと言って、ある人々の信仰をくつがえしているのです。

「俗悪なむだ話」とありますが、その意味するところは、一つに「ますます不敬虔に深入り」させるものであるとあります。ここに書いてある特定の教えは、おそらく情欲をそのままに燃やしていかせるような教えであったと考えられます。3 章 6-7 節にその背景があります。「こういう人々の中には、家々にはいり込み、愚かな女たちをたぶらかしている者がいます。その女たちは、さまざまの情欲に引き回されて罪に罪を重ね、いつも学んではいるが、いつになっても真理を知ることのできない者たちです。」敬虔をもたらすような教えではなく、その反対を促していたようです。そして、「癌のように広がる」とあります。つまり、根強い人気があったようです。

なぜ、そのような不道德なことが教えの中でできてしまうのかについては、「真理からはずれてしまい、復活がすでに起こった」というところにヒントがあるような気がします。テモテ第一 6 章 20 節には、この俗悪なむだ話は、「靈知」と呼ばれていることが書かれています。したがって、これはグノーシス主義に関わる教えでありましょう。グノーシス主義では、神は目に見えない靈に関わっておられるが、肉体は神の関わることはしない領域であるという考えです。肉体においてしていることが、神との関わりには影響がないという考えです。心や靈だけが大事であり、肉体における営みは関わりがないのです。そうすれば、自ずと不品行を行なってもそれが神と関わりがないのだから、ということになります。もっと自由に生きなさい、という教えになっていきます。欲望の奴隷になっているのですが、いや、自分の

そこで、「復活がすでに起こった」というのは、「復活というのは、靈が復活したということだ。」と教えていたのでしょう。肉体の復活ではなく、新しく御靈によって生まれたことが復活であると教えていたと考えられます。肉体の復活の否定であり、その教えによってコリントの教会も墮落していたことを、パウロはコリント第一 15 章で教えています。私たちの信仰が、心のことだけになって、目で見えるところで何を行なっているかは関わりないと考えるのは危険な教えです。男女の関係はそうですし、例えば目に見える献金も、教会に体を運ばせることも、そして迫害に耐えることもそうです。ローマ社会では、皇帝は主であるということをクリスチャンは拒否しましたが、いや、「心でキリストを主と告白すればよいのだから、口で何を言っても関係ない。」となります。事実、戦時中、日本のキリスト教会の指導者が法廷で、キリストの再臨について問われた時、「これは、心の中に主が来られるという、靈的なものである。」という言い逃れをしました。このように、キリストが肉体をもって甦られたということ、そしてキリストにつながる者も肉体をもって甦るという希望は、私たちがこの肉体で何を行なうかというところに大きな変化をもたらします。

そして、「ヒメナオとピレトはその仲間です。」とパウロは名指しています。ヒメナオについては、第一の手紙 1 章 20 節で、「サタンに引き渡した」という言葉を持って既に名指しています。使徒としての霊的権限を使ったのだと思われますが、そのようにしてキリスト教会が異端や異端的教えを奉じている者に対しては、名指して教会を守るということを行なう時があります。

2B 神の不動の礎 19

19 それにもかかわらず、神の不動の礎は堅く置かれていて、それに次のような銘が刻まれています。「主はご自分に属する者を知っておられる。」また、「主の御名を呼ぶ者は、だれでも不義を離れよ。」

ここは大事ですね。俗悪なむだ話が、癌のように広まっていく中で、私たちに必要なのは「神の不動の礎」です。健全な教えの基礎が必要です。多くの巷に広まっている、偏った教えは、そのほとんどが基礎を忘れていることです。野球についていうならば、素振りを何度もして、それでようやく、バッティングにおける特殊な技能を習得できるのですが、その特殊な技能ばかりに目を留めて、素振りに基礎練習をせずに学んだら、とても危険であることは良く分かりますね。自動車教習所に行っていないのに、スポーツ車を乗り回している状態とも言えましょう。そうではありません、しっかりと基礎を身に付けるのです。真理のことばによる神の不動の礎が、堅く置かれています。

そして、その基礎において二つの銘が刻まれていることになります。「主はご自分に属する者を知っておられる。」ということです。これは神が行ってくださっていることです。私たちが、自分が神にしがみついていないと、信仰から離れてしまうと過度に心配する必要はありません。基礎固めをしているなかで、ますます神が私をご自分に属するようにならざることを確信するようになります。それと同時に、私たちが神に応答する部分が明確になっていきます。「だれでも不義を離れよ。」とあります。私たちが神のものであり、そして私たちは不義から離れる選択をしなければいけません。

ここの二つの銘は、民数記 16 章のコラの反乱のところから来ているのではないかとされています。荒野の旅において、コラが人々を煽って、モーセとアロンに逆らわせるようにしました。それでモーセがコラとその仲間にごう告げます。「16:5 あしたの朝、主は、だれがご自分のものか、だれが聖なるものかをお示しになり、その者をご自分に近づけられる。主は、ご自分が選ぶ者をご自分に近づけられるのだ。」火皿を彼らに取らせて、会見の天幕の前に立たせましたが、コラは生きたまま地面が割れて、陰府に投げ落とされ、これら火皿を持っている者たちはそこからの火で焼き尽くされました。このことが起こる前に、モーセは近づいている会衆に次のように警告しています。「16:26 さあ、この悪者どもの天幕から離れ、彼らのものには何にもさわらぬ。彼らのすべての罪のために、あなたがたが滅ぼし尽くされるといけなから。」この情景を考えながら、パウロが書いたものと思われます。つまり、主に属する者たちは裁かれることがない、殺されることはない、ということ。けれども、これらの偽教師らから離れないといけなことを教えています。

2A 不義を避けた生活 20-26

1B 尊い器 20-21

そして次に、こうした不義から離れることについて、もっと詳しく話していきます。

20 大きな家には、金や銀の器だけでなく、木や土の器もあります。また、ある物は尊いことに、ある物は卑しいことに用います。21 ですから、だれでも自分自身をきよめて、これらのことを離れるなら、その人は尊いことに使われる器となります。すなわち、聖められたもの、主人にとって有益なもの、あらゆる良いわざに間に合うものとなるのです。

私たちはみな、神の大きな家の器に喩えられています。尊い器もあれば、ごみ箱のような卑しいことに使われる器もあります。主が、その働きを認めて、尊ばれることもありますし、そうではなく卑しめられることもあります。偽りの教えをしている者、不義の中にいる者は卑しい器ですが、不義から離れている者たちは尊い器とみなされます。

聖めというのは、神の行なわれる業です。「1ヨハネ 1:9 もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」私たちが自分を清めることはできず、私たちが主に自分のありのままの姿を持っていき、へりくだり、また罪を告白すれば、主が清めてくださいます。けれども、その聖めの働きの中に私たちが関わっていく積極性が必要になります。神が清めてくださるのですが、私たちがその中に関わるようにも命じられているのです。それが、「だれでも自分自身をきよめて、これらのことを離れる」というものです。神は心の中の汚れを清めてくださいますが、私たちが自分の体を動かして、そうした汚れから離れるという積極的行為もあって、それで神の聖さの中に自分自身を保つことができます。

2B 情欲 22

その具体的なことが、22 節と 23 節に書いてあります。

22 それで、あなたは、若い時の情欲を避け、きよい心で主を呼び求める人たちとともに、義と信仰と愛と平和を追い求めなさい。

情欲からの聖めです。情欲を教会の中で許すような教えがありましたし、テモテ自身若いので、若さにある情欲との葛藤もあったことでしょう。ところで、「情欲」というのは必ずしも性欲に関わるものだと限りません。神の与えておられる境界線を越えて肉体の欲求を満たす時に情欲になります。ここでは主に性欲に関わる情欲でしょう。情欲に打ち勝つには、祈り、御言葉、聖霊の力が必要です。つまり、神のしてくださる業をお迎えすることです。

けれども、私たちのほうでも積極的にその業に関わっていくことが必要で、それが、「避ける」ということです。その良い手本が、エジプトにいたヨセフです。主人の妻に言い寄られたときは、彼は

文字通り逃げました。悩まないのです、自分がそこにおいても免疫があると思っではならぬのです、その誘惑のある場面や場所から逃れるということによって、初めて誘惑から守られます。そして、避けるだけでなく、「追い求め」ることも必要です。避けることと、追い求めることのどちらもが必要です。「きよい心で主を呼び求める人たちとともに、義と信仰と愛と平和を追い求めなさい。」とあります。同じように、主の御名を呼び求める人々と交わってください。「きよい心」とあるように、自分の汚れを許してしまうような悪い仲間であってははいけません。そして、「義と信仰と愛と平和」を追い求めます。そうすれば、その交わりが自分自身を守るのです。ですから、私たちがこのように集まり、主を求めることは私たち自身のために必要です、主が真ん中におられて守ってくださいます。

3B 無知な思弁 23-26

23 愚かで、無知な思弁を避けなさい。それが争いのもとであることは、あなたが知っているとおりにです。24 主のしもべが争ってははいけません。むしろ、すべての人に優しくし、よく教え、よく忍び、25 反対する人たちを柔和な心で訓戒しなさい。もしかすると、神は彼らに悔い改めの心を与えて真理を悟らせてくださるでしょう。

不義から離れること、自分自身を聖めることで必要なのは、第二に、「争いを避ける」ことです。無知な思弁について、我々男は、また若者はその口論の中に巻き込まれる誘惑が強いです。それから避けなさいとパウロは教えています。「愚かで、無知な思弁」とありますが、これはテモテ第一 1 章にも出てきました、律法を知っていると言いながら何を自分で言っているのか分かっていないということのパウロは言っていました。そういうものに関わると、争いが起こってしまいます。だから避けます。

そして、主のしもべは、主の柔和さを人々に示さないといけません。ですから、争うことは避けなければいけません。「むしろ、すべての人に優しくし、よく教え、よく忍び、25 反対する人たちを柔和な心で訓戒しなさい。」とあります。人々に対する態度は優しさです。そして、もう一つはしっかりと教えていくことです。その時に忍耐を働かせます。教えるのを理解するには、時間がかかります。そして、「反対する人たち」についてですが、彼らに対しても柔和な心で接します。争う誘惑は来ますが、柔和さで対応するのです。しかし、それはその問題に対峙しないということではありません。むしろ、「訓戒しなさい」と言っています。そして対峙するなかで、柔和さをもって対峙するなかで、自分ではなく、「もしかすると、神は彼らに悔い改めの心を与えて真理を悟らせてくださるでしょう。」と言っています。主が悔い改めの心を与えてくださるかもしれないのです。しかし、主とて、悔い改めを強要することはできません。主の慈しみに触れて、応答して悔い改めるからです。

26 それで悪魔に捕えられて思うままにされている人々でも、目ざめてそのわなをのがれることもあるでしょう。

争ってくる者たちに対処する時は、その背後に悪魔の仕業があることが、ここから明確に分かり

ます。ですから、知的な議論であっても、霊の戦いなのです。悪魔が思いのままにその人を操っているということに気づくことが必要です。ゆえに、私たちがその策略に引き込まれることのないように、忍耐と、柔和さをしっかりと身につけていなければいけないということです。そして、その人が気づくのは飽くまでも神がしてくださることです。「目ざめてそのわなをのがれることもあるでしょう」と言っています。保障できるものではありません。本人の選択なので、できないのです。けれども、柔和に訓戒するところで、主が目を開かせてくださる可能性が出てきます。

私たちが、真理のことばをしっかりと保つ共同体として、まっすぐな道を歩むことができるようにお祈りします。